

スライダス

堀田善衛



スフィングス

堀田善衛

毎日新聞社

スフィックス

定価一、二〇〇円

一九六五年五月二十日 第一刷
一九七三年三月二十日 新装第一刷
一九七四年九月十五日 新装第二刷

著者 堀田善衛

編集人 浜田琉司

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町

印刷 凸版印刷
製本 大日製本

© Yoshie Hotta 1965 Printed in Japan

0093-400102-7904

スフィックス 目次

一年目のバリ

“中国人か？”

カイロはどうですか

生活がない……

脅迫状

勇敢なる人々

ゲイシャについて

腹芸について

デイ・アンド・ナイト

武器とカラスミとエビについて

心に雨の降るとき

日本のみなさんと……	一〇一
“インシュアラ”	一〇八
いまこの瞬間に	一一五
どす黒いユーモア	一二三
はっはっはっ	一三〇
“青い城”で	一三八
美術品について	一四五
恐怖と陶酔について	一五三
ペンキ屋のゴヤとヴェラスケス	一六〇
自然に、自然に	一七四
ドイツの休日	一八二
信号は赤	一九九
“赤い手”か	二〇七
深夜のドライブ	二一五
ブルースト野郎とあわれなヴェトナム人	二二三

“痛いよう”

密林の戦い

最醜の連中と

“ナイロン・ファック”

暗黒の部分

ベッド・サイド

トルコの詩

千客万来

太陽の輪

危い橋

黒い巨樹

謎の部分

幻の鉄路

エルベ河

物静かな人

三〇

三八

三三

三三

三〇

二八

二五

二七

二九

二六

二九

三〇

二八

二六

三三



沈黙について	三三〇
“最後”のそのあと	三三七
太陽の裏側	三四四
湖底のスフィンクス	三五三
あつけらかん?	三五九
黒い覆面	三六七
奇妙な求婚	三七四
熱いチーズ料理	三八一
ピカソの時計	三八八
悪い知らせ	三九六
死と生と	四〇三

ス
フ
ィ
ン
ク
ス

F I : N = アルジェリア民族解
放戦線

M N A = フランスとの妥協を
めざす穏健派

赤い手 = (マン・ルージュ) =
北アフリカの独立運
動を弾圧するテロ機
関

CATENA = 同じく テロ機関
原意はラテン語で
鎖

O A S = FLNに対抗するフ
ランス側の秘密軍事
組織

「一年目のパリ」

二月のバリはおそろしく寒かった。節子にとっては、着いた——というよりも一年ぶりで帰って来たバリであり、カイロからベイルートを経て来た機上ではあれこれとパリ大学の地理学研究所にいた頃のことを思い出してなつかしがっていたのだったが、その寒さに、まず参ってしまった。こんな筈ではなかったのに、とは思ってみるものの、冷たい雨が降るのをホテルの窓から眺めていると、もう外へ出る気がしなくなってしまう。

ベッドの上にあぐらをかいて、こんな筈ではなかったのに、と思いつつ冷たい雨に暮れて行く、どんよりと暗い空を見上げて、珍しく彼女は考え込んでしまった。彼女は留学生として三年間をすでにこのバリで過ごし、学費の期限が切れたところでうまくユネスコの試験に合格して、カイロ駐在を命ぜられていた。主な仕事は、アスワン・ハイ・ダム completion とともに水没する筈の、ナイル上流のヌービア遺跡救済事業の資金関係のもので、会計の仕事なんかじゃ、なんのために地理学研究所へ行っていたんだかわか

らぬ、という不満も、こんな筈ではなかったのに、という感じのなかに入っていたのだが、もとよりそれだけではなかった。

「一つ、ひとつひとつ勘定してみようか……」

とひとりつぶやいてみた。

まず、この寒さだ。

二月のカイロも、決してあたたかいとは言えないが、もとより暖房がいるというほどのことはない。しかし一步カイロから出て砂漠で日が暮れたりすると温度は急激に下り、バリのこの寒さにも劣らぬほどになることも珍しくないのだ。そうして、現実の砂漠というものは怖いものだった。それは、結局、生を否定する無限の死の砂のひろがりであり、自動車からはなれて、ほんの少しでも砂のなかへ歩き入ると、もう背筋に寒気がして来るほどのものであった。それと比べてこのバリは、と思うと、節子は自分が異様な、一種の違和感にとらえられているにすぎないのだ、一晩眠れば、すぐにもとのバリとなじむことが出来るだろう、というふうに自分を慰めようとするのだが、どうにもそれがうまく行きそうにない、と思われるのである。

だから、というわけでもなかったが、今度のバリ帰りに、かつて三年間をすごしたカルチュエ・ラタンの学生街にある安宿などではなくて、五分も歩けばシャンゼリゼーへ

出られる横町の、バリでも第二流と思われる、彼女としては晴れがましいホテル・フロリダというホテルに宿をとったのであった。そこから、いろいろな友人たちに威張って電話をかけて、みんなに夕食をおごってやろう、と思つて来たのであった。ホテルがいくら晴れがましくても、その食堂で食事をさえしなければ、宿賃などはしたものであり、一流ホテルの一番安い部屋にとまるのが彼女の旅行法でもあった。それに国連の職員は、誰でも旅先では外交官程度にはふるまうことの出来る待遇をもらっていた。だからまだバリにのこっている筈の留学生仲間を呼びあつめて、といったことも考えて来たのである。まず第一にあの「青菜」嬢を呼び出してやろう、と考えていたのだ。「青菜」というのは、心理学の勉強に北海道から来ている女子留学生の仇名であつたが、彼女はほんとうにバリに来て「青菜に塩」であつた。金が足らないのと、どうしても西洋料理になじめなかつたので、安いヴェトナム料理をほんの少し食べて瘦せかけ、真っ青な顔色をして学生街の屋根裏に住んでいた。日本からの留学生にも、この「青菜」さんがピンであるかキリであるかはわからないが、実にさまざまな人たちがいた。外貨の枠をどこをどう突破して来るのかは別として、女友達や男友達を大勢つくり、新しいシトロエンなどを乗りまわしているのもいた。かと思えば、

期間一年の予定で来たのに、八カ月目に妊娠してしまい、日本での中絶手術ギリギリのところまでがんばってあわてて帰国した仲間もいた。

そういう連中に会つてみたい、とは思ふ。

けれども、ここまで来て、ホテルの受付の大きな宿泊人台帳に Mlle. Setsuko Kikuchi 菊池節子と署名した瞬間から、なにかしら気抜けがしたみたいで、ベッドにあぐらをかいて考え込んでみると、しきりにこんな筈じゃなかつた、という気がするのである。

受付の老人は台帳の署名を読もうとしてえらい苦勞をしていた。「キクチ」ということばは、おそらくは日本人以外のどんな外国人にもまともに発音は出来ない。老人は、

「キキッチイ……」

といつてみたり、

「チチツキイ……」

といつてみたりして、しまいには諦めたように両肩をすばめてみせたが、いつものようににはにっこり笑つて「キ・ク・チ」と何度もゆつくり教えてやることもせず、知らぬ顔でエレヴェーターに向つてしまったのだった。

考え込んでいて、なんとなく気が滅入つてくるので、彼女は少し明るいことでも考えなけりや、と思ひつき、この

ホテルへ父の紹介状をもって来ていた代議士に呼び出されたときのことを思い出してみた。それを思い出すと、さすがに彼女も、

「フフフ……」

と含み笑いにひとりで笑い出してしまった。彼女は元來は屈託のない、すこぶる呑気な女だったのだ。地理学研究所での彼女の専攻は、『砂漠』だった。砂漠のない日本で役に立てようもないものを研究した……。

その代議士は、節子に会うや否や、大きな声をはり上げて言ったものだった。

「あんたたち留学生たちじゃろう、日本の国會議員がバリへ来て、セーヌ河のふちにあるノートルダムを見物して、ノートルダム、ノートルダムちうけれども、どこにもダムなんかありませんじゃいか、お寺ばかりじゃないかのオ、ちうたちうデマをとばしたりしたのは……。ハッハッハッ」と。

またこの代議士は、

「イタリーじゃあんた、こんな話を聞かされましたがね。やっぱりその、国會議員がローマ時代の廢墟を見物に行つて、イタリーは戦災復興がおくれているのオ、と言ったちうんじゃ。無茶を言いよる。こんなデマをとばしたのも、

きつとこのバリあたりにとごろをまいとる日本人留学生どもじゃ、きつとそうじゃとわしは睨んどるが、少なくとも日本の国會議員にはそんなバカはおりやしませんぞ。ハッハッハッ」

と大声で笑った。

そのときは、節子もこの代議士といっしょになつてロビイっぽいにひびきわたるほどに笑つてしまった。そうして節子は、

「じゃ先生、あたしが面白いお話をもう一つお教えしようか。お土産になりますよ」

といたずらっぽく片眼をつぶってみせて、

「ずいぶん前のお話なんですよ。ヨシダ首相がね、バリへおいでになつたの……」

と切り出すと、この代議士は不意に乗り出して来て、

「ナニ、ナニ、ヨシダさんが……」

と眼を光らせた。

「そうなの。そのヨシダさんがね、バリのギャル・デュ・ノールの駅におつきになつたの。そしたら、お出迎えに出ていられたその頃の大使がね、ヨシダさんの顔を見て感激してね、しばらくお目にかかりませんでした、お元気なお顔を拝見しまして安心いたしました、なんのお褒りもなくてまことに……。つて挨拶をなさつて涙をぼろぼろこぼ

されたの」

「涙をね、フーン、ずいぶん風変わりな大使じゃな」

「ええ……。そしたらヨシダさんがね、あたりまえじゃ、二年や三年でメッカチや鼻ツカケになつてたまるかい、つておっしゃつた、つていうの」

すると代議士は大いに喜んで、

「フーン、やっぱりねえ、あの老人の言いそうなこっちゃ。そうこなくちな」

と、なにがそうこなくちゃいけないのかわからなかったが、太い股をびちゃびちゃ叩いて大笑したものだ。そうして節子はこの代議士に大いに気に入られて、その夜は、

「第一流のフランス料理を食に行こう」

というわけでマキシムという家へ行つたはよかったが、二人で八十ドルばかりもとられ、先生は眼をむいてしまった。

そういうことがあった。

そのときの、あの先生の目ん玉を思い出して、ひとりで含み笑いをしても、しかし、実はさして愉快でもなんでもない……。

ベッドからすべりおりて、素足のままで窓の前に立った。外はまだ午後の五時なのに、もう真つ暗である。古風

な開き戸の窓の向うは、アメリカの新聞社の支局である。支局といつても、そこで欧州版を刷っているの五階建の建物のぜんぶを占領していたが、窓から内側をのぞいてみても、日本の新聞社とは違つて、すこぶるひっそりかんとしている。ネオンも電光ニュースもなにもない。背の高い街燈に照らし出されている道にも、ほとんど人影がない。片側に列になつて駐車している車のほかは、あまり車も通らない。

街路を見下しながら、またまた、なにがいったいこんな筈じゃなかった、というのだろう、と考へてみる。

バリは、バリだ。いつにかわらず、古風で、ショウウィンドウをのぞけば、深い色をたたえた赤と黒と金の色が美しい……。

なるほど変つたといえはたしかに、エジプトへ赴任することになつて、出版部長をしている日本人の先輩に見送られてバリを出た昨年の春と、一九六二年の現在とでは、たしかに變つてはいる。

第一あんな、と思ひながら下を見ていると、そのあんなが、二人、自動小銃を胸にかかえて通りの奥から歩いて来た。一年前には、あんな自動小銃をかかえた兵隊がこのバリに、いたにはいたにしても、それほど目立つことはなかったのに、飛行場からの車のなかから見たところでは、主

な銀行や官庁、劇場などの前には、必ずといっていいほどに二人ずつ立っていた。アルジェリアをめぐる情勢がそれだけきびしく煮詰まって来ているのだ。アルジェリアの独立に賛成の政治家や文士などの住居に対して、略して「ブラ」と呼ばれているプラスチック爆弾を仕掛けるようなこともぼつぼつ起っていた。飛行場でも、アラブ人やアフリカ人たちは気の毒なほどにしつこく荷物を検査されていた。彼らのなかで、荷物に何の嫌疑がなかったとしても、マークされた者には、即刻尾行がつくであらうし、滞在中も様々なかたちで警察その他からの厭がらせに近い干渉がなされるであらうことは、前に三年間いた頃の経験からしても彼女には想像出来る。節子自身は国連発行の証明書のおかげで、税関も何ももちろんフリーパスであった。

はだしのままで、部屋裡をべたべた歩きまわりながら、カイロでの一年間に親しくなったさまざまなアルジェリア人やアフリカの人たちのことを思い出していた。カイロには、アルジェリア臨時政府の正式な出張所があり、そこには彼女は何人もの友人をもっていた。またカイロには、多くの政治亡命者たちが住んでいた。アフリカの激烈な政治運動は、多くの亡命者を出していた。まだ植民地支配にあえいでいる国々からは独立運動をしている人々が、またすでに独立した国々からは、現政府のやり方に対する反対者た

ちが亡命して来、その亡命を正式にアラブ連合政府から認められた人々は、それぞれ事務所をもち、アラブ連合政府から援助をうけていた。彼女は、そういう黒い亡命者たちのなかにも、何人かの友人をもっていた。あるとき、遊びに来ないかと言われて、何の気もなくそういう事務所の一つに行つて話しているとき、ふとあけられたデスクの引出しのなかに、むき出しの拳銃があるのをちらと見て、この人たちがどんな危険を犯しているのかをしみじみと感じたことがあった。カイロの政府から認められて事務所をもつたといつても、身分的にそれで安心ということは、この人たちにはありえなかった。いつなんどきカイロ政府の方針が、政府の都合と称するものによって変更され、最悪の場合には追放を食ふことだっていくらでもありえたのだ。追放されたらどこへ行くか？ 多くの場合、それは他の友好的なアフリカの独立国へ再亡命ということになるのだったが、スイスのジュネーヴへ行く人も少なくなかった。

そうして彼女は、そういうつきあいがあるということ、日本大使館からは嫌われていた、というよりも厄介者視されていた。けれども、だからといって節子はそういう人たちとのつきあいをやめたりすることはなかった。彼女は国連の職員であつて——という口実はそういう場合にはなかなか便利であつたし、なにも彼女自身政治運動のよう

なものをしていたわけではない……。

一度は、三等書記官の土井が、いかにも親切めかして、「そんな連中とつきあっていると、いずれろくなことになるませんよ」

などと、上司の意向をそっとたえてやるといった顔で言ったとき、節子は、

「そんならあたし、ここに日本事務所^{ジャパネーズ}つてのもつくろふかしら。日本にもきつと喜んで来たがる人が相当いてよ」と真顔で言いかえしてやり、ひとりになったときに思い切り笑ったことがあった。

そういう亡命事務所^{オブリイ}にいる連中のうち、アルジェリア臨時政府の出張所^{ビュロー}にいるベン・アシュラフのことを思うと、いつでも彼女はおかしくなつて噴き出したくなる。薄青い眼鏡をかけて三十分には一回は胸のポケットから櫛をとり出して髪をくしけずるほどにおしゃれな、痩せ型の青年だったが、おそろしいあわて者で、電話のダイヤルを間違わずに一回でかけられることがほとんどなかった。何度でも間違えては、しまいに電話器を床に叩きつけてこわしてしまい、譴責処分を食ったことがあった。

この青年からはバリの友人にあてた手紙を一通托されていた。ただしアドレスはわからない、といってそこへ聞けばわかるというバリの電話番号だけを聞いて来ていた。

「そうだった……」

とつぶやいてベン・アシュラフの栗色の髪のを思い出してしていると、彼がこのバリで組織運動をやっていたとき、警察に追われた経験を話してくれたときのことかよみがえつて来た。逃げまわり追い詰められてとうとう彼はモンパルナス駅まで来た。途中で手に負傷をしていた。しばらくハンカチーフには血がにじんでいた。駅や港はもつとも警戒のきびしいところである。方々に眼がキラキラと光っている、と思われた。そこで、彼ももうこれまで、と覚悟をして荷物に腰をおろし、ふと思いついて、そつと口笛で「インタナシヨナル」を吹いてみたところ、どこからともなく鉄道労働者たちがあらわれ、アルジェリア人か、と問い、そうだと、という、と、荷物を一つかつがせ、そのまま貨物列車に放り込んでくれたので難をまぬがれた、というのである。

「じゃあなたはコミュニスト？」

と節子がたずねると、

「否、否、断じて否。おれはナシヨナリストさ」

と青い眼をむき出し、大袈裟な身振りで彼女の問いを否定したものだ。フランスのコミュニストに生命を救われないがら、この男はけろりとしていた。

そういう、けろりとしたところが、また節子は好きだつ

たのだ。ベン・アシュラフは節子の顔を見る毎に、あなたの部屋に飾ってある日本人形をくれないか、と言う。彼女はガラス箱に入った藤娘の人形を一つもっていた。彼がそれをねだる毎に、節子は、

「ボークラ！」

と言うことにしていた。

ボークラというのは、アラブ語で「明日」という意味であった。彼女がそう返事をするにきめていたのは、ベン・アシュラフ青年に何か用向きのことを頼んでも、またそれをいくら催促しても、いつでも返事は、

「明日、明日！」

で、彼にとって明日は、今日の次の日どころか、無限に遠いところにあるものであるらしかったからである。

しまいには、カイロの町角で不意に出会ったりしたときにも、お互いに、

「今日は！」

などとは言わずに、

「明日は！」

と言いかわすようになっていた。

スペイン人の、何事につけても、明日！明日！で一向に用が便じないのも有名であったが、それはひよっとするとアラブの影響を濃くうけているせいかな、と思うことも

節子にはあった。いずれにしても、カンカン照りの砂漠のどまんかなどでは、永遠だけがあつて明日も今日もあつたものではなかったかもしれない。

それに、いままなお血を流して戦っているアルジェリアの彼らにとって、「明日」は特別な意味をもっているかもしれない。だから、緊急の用でないかぎり、節子はベン・アシュラフ青年の「明日」には寛大だったし、アシュラフも藤娘人形の「明日」についても決して急ぎはしなかった。が、彼は決してそれを忘れることがなかった。一週に一度しか会わなくても、二日に一度会っても、会話のなかに必ず藤娘のことが出て来た。

けれども、大使館の土井青年にとっては、このアラブ民族の「明日」は胸糞の悪くなるほどのものであった。そういうとき、いつも彼女は、

「少し砂漠のことでも勉強してみたらどう？」

と皮肉ったものであったが、土井青年は相変らずいまでも怒っていることであろう。そういえば、いまでは回教徒になり切っているかと思われる、カイロの主といわれている奥田氏も、この「明日」にだけは悩まされる、と白状していたことがあつた……。この奥田と呼ばれる日本人は、本名かどうかわからなかったが、戦争前の一九三五年に参謀本部から派遣されてカイロのアズハル大学を卒業

し、戦時中も回教圈やインドをうろつき、敗戦時にひょこり上海にあらわれたという人物で、いまもカイロのアラブ人地区に住みつき、何をしているのかわからぬというところで在留日本人からはなんとなく薄気味わるがられていた。はだしのまま、

「そうだった電話をかけなきゃ……」

とつぶやいて受話器をとりあげ、ベン・アシュラフが書いてくれた電話番号DAN62-73を交換台に申し込んだ。DANは、パリ左岸のダントン広場周辺の番号を意味した。

“中国人か？”

受話器の底で、パリの電話に特有の、頼りないような浅い呼び出し音が、二回、三回と鳴っている。その呼び出しのベルの音を耳にしながら、ふと、気付いた。カイロでベン・アシュラフからこの手紙を托されたとき、あわて者のアシュラフは相手の名前だけを言い、アドレスはわからぬが、ここへ電話をかけてくれればわかるという、その電話番号だけを節子に書きとらせて、その番号の所有者の名を

教えなかった。

もとより、ベン・アシュラフがあわて者ということもあったが、それ以上に、彼が安全のために心くばりをして、あえて封筒に宛名も書かず、住所も教えず、またDAN62-73という電話番号の所有者の名もまた言わなかったということがあったかもしれない……。そうして、それらのことを何も聞かずに、言うまでもなく手紙の内容のことも聞かず仕舞いで引き受けてきた自分のノンキさを自分でほめてやりたい気がしないでもないのだが、さてしかし、いま耳に鳴りつづけているこの呼び出し音が切れて、電話線の向うで、

「もし、もし……」

と返事があったら、さしあたりなと呼びかけたらいいものか……。

と、一瞬の間に考えていると、老婆のようなしゃがれた

女の声で、

「もし、もし……」

と、呼びかけて来た。

仕方がない、節子も、

「もし、もし……」

とくりかえすと、当然なことに、向うはしゃがれ声を一層しゃがらせて、